

●書学書道史学会

会 報

第 3 6 号

平成31年(2019) 1月15日

編集・発行
書学書道史学会
会 報 委 員 会

〒100-0003

東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル9F

(株)毎日学術フォーラム内

TEL : (03)6267-4550

FAX : (03)6267-4555

メールアドレス:

maf-syogaku@mynavi.jp

第二十九回 書学書道史学会大会を終えて

中根 安治



第二十九回書学書道史学会大会が、去る平成三十年十月二十七日(土)・二十八日(日)の両日にわたり、岐阜女子大学文化情報研究センターにおいて開催されました。岐阜県は地理的には日本の中央に位置するとはいえ、不便さもある中はるばる全国からご参集いただき、会場校として感謝しております。

本学初となる書道関係の学会の会場校受諾、お話をいただいた時から緊張して不安を抱きながら準備してまいりました。折しもこの一週間後には、中国美术学院との「姉妹校提携三十周年記念行事」を控え、交流書展・記念授業・書道パフォーマンス・訪日団二十四名を迎えての懇親会等目白押しでした。そこで学生達を各チームに編成し、チーフを中心に取り組んできました

が、見落としがないか慮れるばかりでした。しかし諸先生のご指導・ご協力により、何とか滞りなく予定されたプログラムを全て実施し、無事終了できました。ことに安堵致しております。行き届かぬ点も多々あったかとは思いますが、ご容赦のほどお願い申し上げます。

さて、大会では両日で延べ参加者一二九名を数え、七本の「研究発表」がありました。中でも印象深かったのが「法帖画像アーカイブ」についての発表でした。時代の趨勢か「アナログ」の最たる「書道」の世界にも「デジタル」が活用され、今後はこの対極にある二つが融合された研究が増えていくであろうことでした。次に今大会で初の試みとなる「研究推進のためのクロストーク」が設けられました。熱意溢れる質疑応答が展開され、若手研究者の今後が期待されるものでした。また「講演会」には、京都大学名誉教授の富谷至先生をお迎えし、「中国における書芸術の誕生」と題した講演をいただきました。内容は「木簡」をキーワードとして展開されましたが、先生は「木簡」への造詣が深く、『流沙出土の文字資料』『漢簡語彙考証』『漢簡語彙 中国古代木簡辞典』等の著作とともに、二〇〇二年には「三国文字資料調査団」の団長として自らゴビ沙漠に赴かれました。常々先生は「学者はもつと文字の側面である芸術性に目を向けなければならぬし、書家にはもつと古典の文章の内容を理解して書いてほしい。」と提唱されてみえ、本講演は将にそれを具現化したものとなり、ありがたく拝聴致しました。さらに一日目の夕刻からは、岐阜キャッスルイン一階レストランに於いて「懇親会」が開催されました。予想以上の約六十名の方にご参加いただき、多少手狭な会場ではありましたが、その分親しく多くの方と歓談でき見聞を広めるうれしいひとときでした。

前回大会では、書道博物館・出光美術館での鑑賞の時間が日程に組み込まれており、今回は是非日比野五鳳記念館を紹介したく思っておりましたが、生憎秋の開館が一週間後から諦めざるを得ませんでした。こちらにお出でになる機会がありましたら、訪問されることをお勧めします。

来年は節目の「三十回大会」、伝統ある本学会の歴史に微力ながら参画できました喜びを噛みしめつつ盛会をお祈り致します。

(会場校責任者)

研究促進のためのクロストーク

若手の研究促進をテーマに

コーディネーター

澤田雅弘（諮問委員・大東文化大学）



研究局が新設された平成二十二年起案し、同年の総会で承認され、翌二十三年に第一回公募を行った「特定領域研究促進助成金」制度は、平成二十八年に二つの大きな改定がなされた。その一つは「特定領域」の枠を外したこと、いま一つは研究期間一年助成金十万円を、二年三十万円に変更したことである。今回の「研究促進のためのクロストーク」は研究局の立案に係る。パネラーを務めていただいた四氏は、改定後最初の「研究促進助成金」制度に応募し採択された方々であり、澤田は平成二十二年の本制度起案者であった経緯から、委嘱されコーディネーターを務めさせていただくことになった。

クロストークでは、四氏それぞれに、1 研究課題選定の方法と理由、2 研究進

捗状況、3 研究を進める上での課題もしくは問題点、の三点、特に3を柱に発表いただいた。その後、フロアからの質疑や意見を交えながら、議論は書学研究あるいは書道史研究における普遍的で根本的な課題、分野ごとに直面する問題などに発展した。議論がやや多方面に亘ってしまったのは多分に澤田の責任であるが、書の学際性が生み出す研究の多様性にもよるであろう。議論を継続する必要性を痛感する内容、あるいは改めて確認し合う内容もあつて、わずか九十分ではあつたが、会場全体が刺激的な時間を共有したと思われた。その一々を記録する紙幅はないが、その一端は、以下のパネラー四氏の報告の行間に滲んでいるものと思われる。

研究テーマ「明治大正期の日本書家と中国・台湾の書法界

―山本竟山と長尾雨山を中心に―

蘇 浩（関西大学大学院生）

「明治大正期の日本書家と中国・台湾の書法界―山本竟山と長尾雨山を中心に」という研究テーマで、山本竟山（一八六三～一九三四）を中心に、近代中国書法界を代表する楊守敬（一八三九～一九一五）・吳昌碩（一八四四～一九二七）・羅振玉（一八六六～一九四〇）との交流を主眼に置き、加えて長尾雨山（一八六四～一九四二）の文人活動に注目する。さらに、竟山が台湾に勤務していた間に行われた宗星石（一八六六～一九二三）との交流事例を取り上げ、日・中・台の多彩な交流を明らかにする。碑学書家の竟山と、書画鑑定に秀でた雨山は、清末から民国初期にかけて、関西に将来された大量の中国の美術品に目を通し、特に雨山は内藤湖南と羅振玉と共にしばしば鑑定及び題跋を頼まれた。両氏は、近代の日中の文人たちとネットワークを築き、近代日中交流の架け橋として文墨趣味を伝える重要人物である。本研究は、文化交渉学の視点から、両氏を代表とする日中の書道交流の位置づけと評価することを一つの目的とする。

一般的には、明治十三年、楊守敬が大量の北碑の碑板法帖を携えて来日して、以後碑学派の書風が日本で盛んになったという観点が共有されている。しかし、視野を広げて竟山・雨山の碑帖兼容の書意識の考察を通して、「北碑・六朝書」の日本に対する影響の局限性を確認するのは問題点の一つになる。それに、両氏の著述が少ないため、竟山『竟山学古』と雨山『中国書画話』の全貌を理解するのは容易ではなく、また数多くの書簡（特に候文、くずし字）や筆談を解読する正確性も問われる。

研究テーマ「鄧系篆書を受容と展開―嘉慶期から同治期までを中心に―」

林 司洋（筑波大学大学院生）

●研究概要と、研究にあつた課題や問題点について

清代の篆書の大家である鄧石如（一七四三～一八〇五）は、後世の篆書と篆刻の発展に大きな影響を与えている。鄧の篆刻の技法を継承している「鄧派」、または「皖派」という印

人の先行研究が多く見られる。篆書遺品における特徴についても言及がみられるものの、鄧自身が提唱した疎・密の関係には再考の余地が残る。

そのため、本研究では鄧の篆書における疎・密について、具体的な特徴や表現に焦点を当てる。さらに、鄧以降の書人（鄧系）の書人たちは、如何に鄧の疎・密の表現を受容し、展開させたのか、という点にも踏み込みたい。なお、この研究を通して、篆刻の「鄧派」と異なる視点で、それぞれの「鄧系」書人たちの疎密観に触れ、清代篆書史に最も影響を与えた技法の解明を期待する。

現段階では、二つの成果を導き出している。一つ目は、鄧の嘉慶期以後において、疎・密を強調する書法を成す要因として、「瑯邪臺刻石」に近い疎・密の変化が見られることである。二つ目は、鄧の疎・密の表現が最も強調された時期より、鄧自身の疎・密の意識を模索した点である。

今後の課題として、偽作を避けるため、「鄧系」書人の遺墨考察は、書人の経歴などに基づいて、より慎重に行うべきであると考えている。さらに、疎・密に関する文献資料の収集はもとより、疎・密を強調する理由や当時の美意識との関連性について、考察する必要性がある。

研究テーマ「中国古代における「書」思想史の定立」

関 俊史（早稲田大学大学院生）

報告者の研究は、書論の系譜としての書論史という視角ではなく、『法書要録』を中心とする一連の資料群を対象として、そこに底流する思想を鉤索し、確定することで、「書」思想史の定立を企図するものである。そもそも書論は「書を直接の主題とする言説であるが、それらは当然ながら、三教四学を基層に据えた当時の文化的背景を前提に成立している。そこで本研究は、書論文獻の分析を通じて、当時の知識層における文化状況の一端の解明を目指している。今回のクロストークにより得られた今後の課題は、主に下記の二点である。第一点は、実作と理論、あるいは思想との関係である。現時点で報告者は、たとえ同一人物であっても、その実作と理論には大きな影響関係を認めたいと考えている。それは「書」の実作における「率意」を認める以上、そこには平生の論理を超出したところが想定されており、ゆえに理論や思想がそのまま「書」に反映されるとは限らないためである。この問題については、改めて討究したく思う。第二点は、人文学の危機の時代にあつ

て、書学書道史研究は何を提示し、何に貢献しうるか、という課題である。これは我々が研究を推進していくにあたっての根源的な問題意識であり、専門とする時代・領域を超えた議論が必要であろう。増田知之氏も学会誌二十八号において「斯学はいかに進んでゆくべきか」と提起されているが、このことを共有する多くの諸賢にご教示を賜りたいと願っている。

研究テーマ「唐代の書体認識に対する書法史的研究

―盛唐期から唐宋の変革を視野に―

剣持翔伍（筑波大学大学院生）

1、研究テーマの概要

本研究では、盛唐期以降の各書体の認識について探るべく、主として文献資料に残された記述から当時の書体認識を考察し、もう一方で実際の五書体の作品に基づき、書体認識を様式的に跡付ける、といった手順で盛唐期から宋代にかけての書体認識を明らかにする。さらにそれを「唐宋の変革」という視点からも捉えることで、時代にどのように位置づけられるか、という点についても明示することを目的とする。

2、研究にあたっての課題や問題点について

上記の研究を進める点で、特に以下の三点を課題と考え取り組んでいることを示し、会場から意見を賜った。

①いかに幅広い研究の視野を持つか

発表者が所属大学の開設授業科目や、書以外の学会で発表を行い、他領域の意見を積極的に取り入れてきた点を紹介した。加えて近年では、WebやSNSの活用なども想定され、より幅広い資料（目）を向ける必要性を提案した。

②いかに書法史研究として客観性を持たせるか

発表者が作品・文献資料の双方を活用し、客観的な考察に努めてきた点を提示した。加えて、書法以外の文学や思想など近接領域の動向や研究方法からも学ぶべきことに言及した。

③いかに研究と実作を有機的に結び付けるか

書の実作者の視点を有する必要性を提起し、研究対象について実際に筆を持つことで、実証的に理解を深めようと試みた例をパワーポイントで示した。

富谷至氏講演「中国における書芸術の成立」講演要旨

文字に芸術性を賦与し、鑑賞の対象となる、それを書芸術といっておこう。書記、記録というのは、意志の伝達、記録をその第一の目的とする実用的な作為であり、芸術的創作をめざした絵画とは異なる。それが書芸術となるには、次の二点を満足させねばならない。

- i 文字を美しく書くという意識。
- ii 他人の書を美しいと見て、それを模倣せんとする意識。

後漢の趙壹（一七八）の「非草書」には、草書はもともと草卒に書こうとして成立した書体なのに、最近では、草書を美しく書くこうして手本を求めて習書していると非難しているが、逆にそれは後漢二世紀半ばには、書芸術が成立の二条件を充足していたといえる。では、前期ではどうであったのか。

「史書」という語がある。江陵張家山出土漢律の史律に見える二字であるが、書記官が使用する書体もしくは書法という意味をもつ。

文献資料、『漢書』『後漢書』にも、「能史書」「善史書」という語



句が十二例ほど確認できる。その意味は、前漢から後漢にかけて行政文書の技巧的書法ではなく、隷書の美しい書体という意味に変化していく。

居延、敦煌漢簡には、「懸針」「波磔」と呼ばれている特徴だった運筆がかなりの数見られる。それは、書記官の個人的運筆ではなく、普遍性をもったものと見なければならぬ。

（一）懸針は、文書のなかで読手の視覚に訴える鍵詞となる語に集中する。

（二）特定の字は、必ず懸針・波磔をともなつて書かれねばならないわけではない。

かかる特徴を有する筆勢が芸術的自覚からの個性的追求であれば、より広汎な字に確認されてもよい。懸針・波磔が書き手の芸術的意識を表わし、美しく書くための技法であったとは、認められないのである。

後漢時代になると、石碑が盛行しそれが書芸術の模範となる。しかし、そこには懸針・波磔はあまり見られない。このことは、懸針が芸術的書体として展開せず、行政文書の書法から昇華しなかったことを示しているといつてもよい。

今一度「史書」の意味を考えてみると、「史」とは、文書を書写する下級役人である。彼らが、上部機関から伝達された命令書を書き写して下級機関に送達し、上級機関への報告書を作成する。かかる文書行政において、書記官が懸針や、波磔を適宜用い、文書にふさわしい書法、つまり文書全体のなかでの視覚的效果、そこから期待される公文書の威信と威圧を与える書法、それが「史書——令史（書記官）の書法」であった。

しかし、「善史書」は、書芸術として優れたという意味をもっていたのではない。あくまで史書は、技術的な書法であ

り、書き手には書芸術への志向はなく、行政文書そのものが書芸術に直接に繋がるというものではない。書芸術はこういつた秦漢時代の文書行政の外縁に、また文書行政の展開が副次的に書芸術を生み出していったと考えられる。

それを生み出した一つの要因は、後漢時代、一世紀前後から顕著となり、以後隆盛に向かう石碑の建立である。石刻は皇帝の詔書を初めとする公的な文書を刻むことからはじまり、やがて私的な頌徳碑と移つていき、広汎に立てられるのだが、そこにおいては、もはや文書の威圧を指摘した書法は必要ではなくなる。命令から賛同・向調への変化であり、与えるべき威信より、目を惹きつける書体、書法がそれに代わつて要求される、行政文書の書体から芸術的書体への転換である。

今ひとつの要因は、草書の属性であろう。草卒に速筆を目的として隷書の崩し字として登場した草書は、芸術的価値をもつ書体とし認められるようになっていく。それは、草書がその内面に芸術性を内包していたからではないか。いったい、平面に描写・書写されたものに美的価値をもたせるのは、そこに立体感をいかに賦与するかが大きな要素であろう。書芸術においては、線の太さや濃淡で文字を三次元的に表現することが一つ、そして今ひとつは躍動感、文字に運動性をもたせることで、立体性を表現することにある。草書はまさにそういった役割を果たすことができた。草書が独立した書体として認識されるようになり、そこに芸術的価値が賦与されることで、逆にそれまでの行政文書の書体（隷書）が草書に対峙する書体として確認され、八分体という書体の美しさが求められた。書体の相対化であり、ここに、書芸術が確立する。

（京都大学名誉教授）

平成29年4月1日～平成30年3月31日

平成29年度 会計決算報告書		
	項 目	決 算 額
収 入	個人会員会費	2,373,200
	団体賛助会費	500,000
	大会参加費	152,000
	大会懇親会費	178,000
	その他の収入	9,600
の 部	本年度収入計	3,212,800
	前年度繰越金	10,678,047
	収 入 合 計	13,890,847
支 出	編集局経費	403,927
	「学会展望」準備費	105,000
	国際局経費	0
	国内局経費	0
	大会運営費	200,000
	大会準備費	100,000
	大会懇親会費	175,000
	学術局経費	0
	研究局経費	1,200,000
	会報編集委経費	0
	ホームページ委経費	272,700
	事務局経費	
	会議費	9,217
	荷造送料	352,811
	遠隔地役員交通費	29,400
	選管費	105,216
	名簿発行費	222,177
	通信費	6,720
	事務消耗品備品費	13,679
	事務委託費	1,367,972
の 部	人件費	90,000
	東洋学・アジア研究連絡協議会	2,000
	予備費	
	本年度支出計	4,655,819
	次年度繰越金	9,235,028
	合 計	13,890,847

平成30年度 会計予算報告書		
	項 目	予 算 額
収 入	個人会員会費	2,800,000
	団体賛助会費	550,000
	大会参加費	150,000
	大会懇親会費	160,000
	その他の収入	30,000
の 部	本年度収入計	3,690,000
	前年度繰越金	9,235,028
	収 入 合 計	12,925,028
支 出	編集局経費	700,000
	「学会展望」準備費	100,000
	国際局経費	300,000
	国内局経費	300,000
	大会運営費	200,000
	大会準備費	100,000
	大会懇親会費	160,000
	学術局経費	100,000
	研究局経費	900,000
	会報編集委経費	30,000
	ホームページ委経費	300,000
	事務局経費	
	会議費	30,000
	荷造送料	500,000
	遠隔地役員交通費	400,000
	選管費	0
	名簿発行費	0
	通信費	8,000
	事務消耗品備品費	10,000
	事務委託費	1,400,000
の 部	人件費	100,000
	東洋学・アジア研究連絡協議会	2,000
	予備費	7,285,028
	本年度支出計	12,925,028
	次年度繰越金	0
	合 計	12,925,028

▽事務連絡(高城弘一事務局長)

▽大会日程等説明

(中根安治教授・会場校責任者)

(連絡)

▽会報委員会報告(小川博章副会報委員長)

▽事務局報告(高城弘一事務局長)

▽研究局報告(河内利治研究局長)

▽国内局報告(笠嶋忠幸国内局長)

▽国際局報告(富田 淳国際局長)

▽学術局報告(矢野千載副学術局長)

▽編集局報告(菅野智明編集局長)

(報告)

(高城弘一事務局長)

▽平成30年度予算・事業活動案

▽平成29年度決算案監査報告(杉浦妙子監事)

▽平成29年度決算・事業活動報告案

(高城弘一事務局長)

(議事)

れも満場一致で可決された。

本年度の第29回大会は、平成30年10月27日・28日の両日、岐阜女子大学文化情報研究センター6階大会議室において開催された。初日冒頭、例年通り本年度総会が開催された。総会は、小川博章理事の司会で、笠嶋忠幸国内局長の開会の辞ではじまった。新潟大学名誉教授、岐阜女子大学野中浩俊教授による開催校代表挨拶、中村伸夫理事長の挨拶に続き、大野修作理事を議長に選出して議事に入り、以下の議事及び報告がなされた。なお、議事については、いずれも満場一致で可決された。

本年度の第29回大会は、平成30年10月27日・28日の両日、岐阜女子大学文化情報研究センター6階大会議室において開催された。初日冒頭、例年通り本年度総会が開催された。総会は、小川博章理事の司会で、笠嶋忠幸国内局長の開会の辞ではじまった。新潟大学名誉教授、岐阜女子大学野中浩俊教授による開催校代表挨拶、中村伸夫理事長の挨拶に続き、大野修作理事を議長に選出して議事に入り、以下の議事及び報告がなされた。なお、議事については、いずれも満場一致で可決された。

各局活動報告

国内局

第29回大会は、岐阜女子大学（文化情報研究センター）において去る10月26日、27日の両日にわたり開催いたしました。会場のご提供ならび準備から大会開催にいたるまで、岐阜女子大学の中根海童先生はじめ同大学の皆様には、多大なご尽力を賜りました。厚く御礼申し上げます。またご発表いただきました会員各位とご出席の皆様にもご協力いただき、深謝申し上げます。来年度第30回大会は、たぐいまれ東京国立博物館での開催に向けて準備中です。詳細は理事会での決定後に、改めてご報告申し上げます。

（国内局長 笠嶋忠幸）

国際局

本年度も、中国大陸・台湾・韓国・アメリカ等における書画・典籍・金石資料に関する特別展・常設展について、各施設がウェブ上で提供する情報にアクセスできる展覧会情報案内をホームページ上に掲載しました。また、外国から講演等で来日する方があれば、広報等をはじめとするご支援をさせていただきたく存じますので、お知らせください。今後とも、海外での最新情報をお伝えべく、各種の情報発信したいと思います。

（国際局長 富田 淳）

学術局

本学会は、WEB学会名鑑では「人文・社会科学」の史学の分野に属していますが、このたびJ-STAGE（ジェイ・ス

テージ）で登録しています「人文・社会科学」分野が、①哲学・宗教、②文学・言語学・芸術学、③人類学・史学・地理学、④法学・政治学、⑤経済学・経営学、⑥社会学、⑦心理学・教育学、の七分野に細分化され、その中から複数選択が可能となりましたことを受け、②と③を選択回答するべく昨秋の理事会で提案し、承認されました。大会の総会で報告いたしましたとおり、学会の実情に鑑み、また学会の認知度向上を図りました。

理事会では「各局から例年同様の情報を学会ホームページに掲載する場合は、直接管理会社（に依頼する）という当局の提案も承認されました。学会誌28号のJ-STAGE掲載も誤りなきよう進めています。公開日が決まり次第、ホームページでお知らせいたします。

なおJ-STAGE掲載経費については、事務局判断により当局からの支出扱いになっていませんことを申し添えます。

（学術局長 森岡 隆）

研究局

岐阜女子大学における第29回大会において、「平成29年度研究促進助成金制度」採択者4名による「研究推進のためのクロストーク」を開催いたしました（詳細は2・3頁参照）。

「平成30（2018）年度研究促進助成金制度」研究計画書の申請が3件ありました。

研究期間：2018年度～2019年度

（2018年9月1日～2020年8月31日の2年間）

研究促進助成金1件につき30万円（3件まで採択）審査の結果、次の2件の採択が承認されました（10月27日理事会）。

前川 知里・美術館設立運動史における書の位置付け
——京都市美術館・大阪市立美術館を中心に——
井田 明宏・後漢時代鎮墓瓶に見る新たな通行書体の書法について

平成29年度4件、平成30年度2件と、平成29年度よりスタートした「研究促進助成金制度」では、順調に採択者が選ばれています。平成31（2019）年度の募集要項（フォーマット）は、4月初旬に学会ホームページにアップロードされますが、基本的に内容は同じですので今からご準備ください。

（研究局長 河内利治）

編集局

本学会誌『書学書道史研究』第二十八号は、会員各位への配送が奥付の期日より若干遅れましたが、編集作業は概ね円滑に進みました。今号には八編の投稿があり、査読の結果、六編を採択・掲載いたしました。査読に当たられた各位には、この場を借りて御礼申し上げます。また、学界展望（執筆の増田知之幹事、書評（執筆の権田瞬一幹事、ご協力いただきました関係各位にも、あわせて御礼申し上げます。

（編集局長 菅野智明）

事務 局

〔平成29年度事業・活動報告〕

5月15日 第33号《会報》発行及び発送

7月31日 第28回大会発表申込締切

8月11日 第14期第3回常任理事会(於 大東文化会館)

10月15日 《大会最終案内》《大会レジュメ集》発行及び発送

11月18日 平成28年度決算会計監査

11月25日 第61回定例理事会(於 日本大学文理学部)

第28回大会1日目(同右)

11月26日 第28回大会2日目(同右)

11月1日 第27号『書学書道史研究』発行及び発送

12月20日 会員名簿発行及び発送

12月31日 第28号『書学書道史研究』投稿申請申込締切

1月15日 第34号《会報》発行及び発送

2月21日 第15期役員選挙投票締切

2月23日 第15期役員選挙開票

(於 毎日学術フォーラム会議室)

3月11日 選挙選出理事による緊急会議

(於 大東文化会館)

3月21日 第62回臨時理事会(於 大東文化会館)

〔平成30年度 事業・活動計画〕

5月15日 第35号《会報》発行及び発送

6月28日 第29回大会発表申込締切

7月1日 第15期第1回常任理事会

(於 大東文化大学書道学科研究スペース)

10月1日 《大会最終案内》《大会レジュメ集》発行及び発送

10月20日 平成29年度決算会計監査

10月27日 第63回定例理事会

(於 岐阜女子大学文化情報研究センター)

第29回大会1日目(同右)

10月28日 第29回大会2日目(同右)

11月1日 第28号『書学書道史研究』発行及び発送

12月31日 第29号『書学書道史研究』投稿申請申込締切

1月15日 第36号《会報》発行及び発送

3月31日 第29号『書学書道史研究』投稿原稿締切

〔平成31(2019)年度・第30回書学書道史学会大会会場(予定)のお知らせ〕

毎年、書学書道史学会大会は、東日本(関東)と西日本

(関東以外)と、会場を交互に移して、実施してきていま

す。平成30年度は、岐阜女子大学文化情報研究センター

において開催されました。平成31(2019)年度は、東日

本(関東)において開催します。総会でも紹介されたよう

に、東京国立博物館を会場校として、10月26日・27日を

開催日として予定しています。ご承知おき下さいますよう

お願いします。

〔学生会員から一般会員への手続について〕

本学会では、学生会員の「有期会員制」を導入していま

す。この制度は、学生会員(学生会費適用の方)が大学院

を修了、もしくは満期退学・自主退学、その他の理由によ

り学籍を失った(学割証の発給対象でなくなった)時点で、

学生会員資格を、一旦終了とするものです。該当の方が

引き続き本学会会員に留まろうとする場合、以下の方が

変更手続きが必要となります。会員変更手続きの用紙

が、学会ホームページにアップしてあります。ホームページ

右の「入会申込書」を選択し、「会員変更申込書」をダウン

ロードして、必要事項を記入の上、学会事務局へ送付して

下さい。また、当該会員手続きは、届け出制度となってい

るため、理事会での資格審査はありません。したがって、書

類提出のみで学生会員資格の終了時点から自動的に一般

会員資格が付与されます。今春に学生会員資格を失う

方は、早めに手続をお願いします。送付先は左記のとおり

です。

〔事務局の連絡先〕
書学書道史学会事務局

〒100-0003
東京都千代田区一ツ橋1-1-1

バレスサイドビル9F(株)毎日学術フォーラム内

TEL 03・6267・4550

FAX 03・6267・4555

Eメール mat-syogaku@mynavi.jp

※書学書道史学会事務局担当 毛塚

(事務局長 高城弘一)

新入会員紹介 事務局

〔一般会員〕

中村 覚 東京大学情報基盤センター

荻野目富増 書家

〔学生会員〕

浦島慧至 二松學舎大学・大学院

來司信博 筑波大学・大学院

中谷瑞希 岐阜女子大学・大学院

江 顔穎 大東文化大学・大学院

※平成30年5月、第29回書学書道史学会大会に申請された方

談話室

バチカンで書への思索

蘇 浩

今年平成最後の夏に、バチカン博物館と図書館に赴いた。そこで、展示されている古代ローマのラテン文字で刻まれた碑石や墓銘の原石を見学した。私が注目したのは、同じラテン文字と言っても、各書体や字姿、色彩がそれぞれ異なる点である。また、碑石の役割は、統治者の功績を語ったり、重大なイベントを記したりする点であった。私はその時、ふと中国漢代から北朝までの碑石文字を思い出した。現在、碑石文字は中国や日本などの東アジア諸国では、書道として確立しているが、西洋社会では、デザインとしての書写（カリグラフィ）が多く、東アジアの書道とは区別される。一方で、漢字とラテン文字は、共にそれぞれ自身に美的・権力的な価値を帯びている。その意味では、東西文化の共時性を有すると言えるのではないだろうか。

先輩 五鳳先生

南條 佳代

偉大なる日比野五鳳先生は、私の小学校の先輩です。さらに、私の祖母とは幼馴染で家が近所でもあり、よく遊んだそうです。母校の岐阜県神戸町立南平野小学校には、校歌をはじめ、先

生の碑や作品が多くあり、小学生だった私は身近過ぎて、その偉大さを感じていませんでした。中庭にあった水槽のような池にも、扁額の如く「まごころ」と先生の書で、石板が埋め込まれていたのですが、幼い私達は「ろこまって何？」と左から読んでいたのを思い出します。

また、神戸町には、春秋開館の五鳳記念美術館もあります。私も書を選び、かなと対峙するようになり、改めて五鳳先生の書の深さ、素晴らしさを感じると共に、身近な先輩を誇りに思い、少しでも近づきたいと思います。

古本まつりに思う

早川 桂央

仲秋はじめの好天の日、神保町の古本まつりに行って参りました。昼から散策を始め、オレンジ色のライトが灯される薄暮時まで、ゆっくりと古書店街を巡る時間が取れたことは幸せなことです。

近年は書道関係、中国学関係の書籍は勿論、状態は悪いですが心惹かれる古紙や印材、筆などが比較的多く出品されているように思います。また投売り常態の青空市に眠っている掘り出し物も、今年は『書道辞典』や『故訓匯纂』のような辞典類が豊作であり、何冊か購入致しました。また私の大学時代の恩師の、そのまた師が「純亦不已」と見返しに揮毫した書籍も見つけ

ました。思わぬ掘り出し物に有頂天でありました。

本を探すも、資料を探すも、字を書くも、根気があるに越したことはありません。根気よく、学んでいきたいです。

臨書の奇策

林 司洋

「書の模範になるものは中国では唐以前、日本では三筆以前のものが最もよろしい」(『天来翁書話』より)という話を耳にした私は、とても驚いた。初学以来、清代の篆書に惹かれて、篆書のみならず各書体も清人の書を多く臨書してきた。今まで習った先生方も、同様に清人の書風に馴染んでいたのである。

「縁があつて比田井天来系の練成会に参加する機会に恵まれた。臨書能力の向上を目的として参加したが、明清の法帖を出して臨書し始めると、すぐに天来の名言を理由として止められたのである。

今まで清代の書を学んできたことに後悔はないが、天来の観念を念頭におけば、おびただしい法帖から範囲を絞ることは、臨書の奇策となり得るのかもしれない。しかし、唐以前はもちろん、唐以後にも膨大な名帖が遺っており、様々な書美が見られる。本当に臨書の必要はないのであろうか？この真意は如何に、愚鈍な私はまだ考えている……。

編集後記

◆今年の干支(えと)は「己亥(キガイ)うちの」といすね。日本では一月一日から亥年となりますが、中国では春節からが亥年となります。今年の春節は二月五日なので、日本の方が早く亥年はやって来ることにありますが、新年から春節までに生まれた人の運勢は戌年？亥年？ (小川博章)

◆出光美術館に着任して、「学芸員」としての一つ一つの業務が、自分の更なる成長に繋がっているように感じています。目の前のことを一所懸命頑張ります。 (金子馨)

◆文政二年(一八一九)の亀田鵬齋「行書類纂序」の中に、「魯公之藁」の記述があります。ちょうど二百年後となる二〇一九年、『祭姪文稿』が日本初公開となります。東博の「顔真卿」展が、楽しみです。

(亀田絵里香)

◆近衛家伝来の文化財を一括で管理する陽明文庫(京都)に初めて訪れたのは、大東文化大学・萩谷朴ゼミ(中古文学)の関西旅行時。その後、筑波大学の社会人修士時での関西研修でも訪れた。筑波から大東に移られた村上列翠亭教授には、その時からお世話になり、陽明文庫での共同研究をさせていただいた。書学の基礎をご教示下さった村上先生は、昨年九月に鬼籍に入られました。合掌。 (高城弘一)

◆平成最後の会報となりました。時代の節目を迎え、今後益々誌面の充実がはかれますよう、会員各位のご意見等お待ちしております。(萱のり子)